

ました。ラテン語で4行の文字が同時に現れました。マドレーヌは、彼女の手が誘導されているのを感じながら、1行ずつ書き写しました。それから、彼女は新たに、それに続く数行に注意を引かれました。それらの新しい行を書いていることに気づかないままに。けれども、そのフランス語に訳された行の中には、いくつかの語が欠けていました。”Pellis indulgens”が省かれており、”iniqua”が示されていませんでした。」

ジェラルド・コルドニエの証言。

この日の出来事の唯一の証人であるスザンヌ・アボワヌは詳細を語っています。「ジェラルドはその場にいませんでした。私はマドレーヌと二人きりでした。ジェラルドは再び立ち去ったばかりでした。マドレーヌは、天井ではなく、窓から空を眺めていました。その後、彼女は叫びました。「聖テレジアと同じことが、私にも起こる。」「いずれにしても、ジェラルドのおかげでこのメッセージが引出しから外に出たことは確かだわ。そうでなければ、誰も知ることがなかった。彼がそれを書いて、私達と別れる前に、約1,000部のコピーを人々に配って行ったわ。」

「彼はカナダの友人にこのドズレの場所のことを伝えていました。この友人は“マドとスズ(つまりマドレーヌとスザンヌ)”という合言葉を言って、聖ヨセフ礼拝堂に現れました。」

第45回目

「主は、主に聞く者全てに祝福を与え、そのメッセージを告げ知らせ、
それを実践する者を幸いなる者、と宣言する。」

1977年7月1日(金)、礼拝堂にて

主任司祭は、司教に会うためカン(あるいはバイユー)に出掛けていました。ブルノ修道女も不在でした。この時私は礼拝堂にT夫人と二人きりでした。バリバリという物音と共に、大天使ミカエルが、御聖体の左側に現れました。私は彼の前にひざまずきましたが、彼は、何も持っていない左手で合図して、御聖体の方へ進むようにと示しました。私が後ろへ下がって、御聖体の前にひざまずいた時、イエスを見ることなくそこから赤と白の光線が放たれるのを見ました。イエスは確かにそこにおられました。なぜなら私は主が放たれる光の中にすっかり浸っているように感じたからです。

大天使は私に言いました：「私はあなたに挨拶します。」彼は頭を振って挨拶し、こう言いました：

「愛に燃える、敬虔な娘よ、神はその教会の中に次の者を打ち立てられました：

1. 使徒 2. 預言者 3. 教師

そして神がお選びになるその他全ての者。⑬けれども、現代の世に生きるあなたは、使徒であり預言者であってあなたの心が命じるままに、それぞれの人と関わるように。慰め主があなたを導きます。神は、明日曙の時に起こるべきことをお知らせになりました。それによって、あなたが見たこと、聞いたこと、イエス・キリストに触れたこと全てが真実であることを証明なさるのです。けれども、この世はなんと不幸なことか。神と戦い、神を拒む、神を恐れない司祭達の故に。神はこの不従順に怒っておられ、その怒りは激しい。けれども、イエスは優しく智慧に富み、その愛は、人類のあらゆる悪にも関わらず、彼らを救いたいと願われるほど大きい。なぜなら、今の時代はこれまでになく最も偽善的で、悪いからです。けれども、行動しようとしぬ司祭達のため、また神がこの世をお裁きになるべき時が来たため、イエスは、ご自分を聞く者全てに祝福を与え、そのメッセージを告げ知らせ、それを実践する者を、幸いなる者、と宣言されます。⑭「けれども、マドレーヌ、あなたは司祭にメッセージを伝える責任を負っていたのですから、司祭の言うことを聞き、連絡を取り続けなさい。⑮ イエスがあなたにお与えになった平安の内に暮らしなさい。心の中で黙想し、祈りに祈りを重ねなさい。なぜなら、イエスはご自身の教会の衰退を嘆いておられるから。」

大天使は消えました。続いて御聖体を取り囲んでいた光線も。

⑬ コリント人への手紙I、12章28節参照

⑭ 一般信徒の使徒職に関する教令1章第3パラグラフ

⑮ オルセ司祭は、司教によってボン・ファルスイでの職を任じられ、ドズレの小教区を去った。

マドレーヌは、イエスが頼まれた通り、司祭と連絡を取り続けるであろう。

第46回

「人によって任命された司祭に、あなたの書いた原稿を手渡してください。」

1977年12月2日(金)、礼拝堂にて

光が現れた後、御聖体から光線が流れ出て、私はある声がこう語るのを聞きました：
「人によって任命された司祭に、あなたの書いた原稿を手渡してください。」
私は、言われた通りにしました。

第 47 回

「サタンがあなたを誘惑しています。」「マドレーヌ、あなたは私のメッセージの唯一
目に見えるしるしなのですから、2度と過ちを犯さないようにしてください。」

1978年2月3日(金) 18時15分、礼拝堂にて

私は午後2時から4時の間、イエスを礼拝しに礼拝堂へ行きました。学校から戻った子供達におやつを与えた後、17時30分にまた礼拝堂に戻って行きました。

この時、礼拝堂へ行くよう呼ばれているように感じていた、と思います。教会の鐘が、18時15分を打つのを聴きました。そこには、年配のルリコレ婦人しかいませんでした。私は喜び溢れました。なぜならこれまでと同様に、御聖体のある場所に光が形作られていくのが見えたからです。つまりそこにはもはや、御聖体も祭壇もないのです。それからイエスが目の前にお現れになりました。私を迎えるかのように、両手を差し伸ばして。私はとても嬉しかったです。なぜなら1976年1月2日(9日間祈禱の最終日)以来、イエスにじかにお会いしていなかったからです。

イエスは、私に言われました：

「十字を切ってください。」

そして目を天に向けて、両手を胸の高さにまで上げ、こう言われました：

「天におられる父の御名によって、私は秩序を整えるために来ました。

サタンが貴方を誘惑しています。私が人類全てに成した約束の最終日、9日目の後、サタンが私のメッセージに問題を起こしに来ました。けれども次のことを良く聞いてください：

イエスは私をご覧になって：

父なる神が幸いなる者ミカエルをお遣わしになる時には、いつも光がその現われに先立ちます。私の言葉を思い出してください：私の名によって、悪霊が来るであろうことを。それらはあなたを誘惑し、光の天使*の姿をとってあなた方の家に来ることで

しょう。彼らを信じてはなりません。彼らはあなた方に過ちを犯させます。気をつけていなさい；あなた方はすでに警告を受けました。あなた方は、サタンが力の限りに働くよう解き放たれた時に生きています；けれども、時はすぐそこまで来ており、私は悪を打ち破るために来ます。」

それからイエスは私を迎えるかのように両手を胸の高さから下げて、こう言われました：

「マドレーヌ、あなたは私のメッセージの唯一目に見えるしるしなので、**2度と過ちを犯さないようにしてください。**

今より、あなたに命じます。あなたに光が現れ次第、十字を切ってください。」

イエスは再び私をご覧になり、微笑まれて言われました：

「もしもそれがサタンならば、その瞬間に全てが消えます。」

イエスは長い間私に微笑まれ、こう言われました：

「平安があなたと共にありますように。」

そして、あたりは元の暗闇に戻りました。

修道女達は、ブリュクールのミサに出掛けていました。ドアは閉まっているものと考えて、私は急いで起こったことを書き留めるため家に戻りました。私はシャワー室に閉じこもりました；このドア以外に鍵を掛けて閉まるドアはないのです。

私は、書くことが出来ませんでした。あまりにも泣けて仕方がなかったからです。

何という悲しみを、私は心に感じていたことか。私はサタンに誘惑されていました。イエスは、その大きな寛大さをもって、私にそのことを言いに来られたのです。

なぜ私にはそのことが分からなかったのでしょうか？確かに私はそれに気づいていなかったのも、私の過ちではありません。疑いなく、そのためにイエスは私にあらかじめ知らせに来られたのです。もはやサタンの誘惑によって、過ちを起こすことのないように。イエス、優しい方、智恵のある方は、その大きな寛大さ、慈しみ深さを持って、私を救いに来られたのです。イエスは、光が目の前に現れる度に、十字を切るように、と言われました。私は、もう**2度とそれをやらずに済ませることはない**でしょう。

* “光の天使” コリント人への手紙II、11章14節

第 48 回目

「父がお選びになったこの聖別され神聖とされた山の上で、全てが新しくなります。」

1978年7月7日(金) 14時、礼拝堂にて

いつもよりは少し大きい光が、御聖体のある場所に現れました。私はイエスが前回教えてくださったように、すぐに十字を切って言いました：「もしもサタンならば、消えるように。」十字を切って、そう言った途端に、私は平安を感じ、心の中に信頼感が広がるのを感じました。それからイエスが姿を現され微笑まれ、こう言われました：

「あなたが見ていることを、彼らに伝えてください。」

そこで私は、見ていることを大きな声で言いました：「イエスが座っておられるのが見えます。その前には祭壇のようなテーブルがひとつありますが、この礼拝堂の祭壇はもはやありません。それは白石のような真っ白なテーブルです。このテーブルの上に、はっきりとは分かりませんが、6~7冊の本が開かれています。もう一冊、同様に開かれた本があつて、イエスが両手に持っておられます。主は私にこう言われました：「これから言うことを大きな声で言ってくださいますか？」私はひとフレーズ毎繰り返しました：「気をつけなさい。あなた方に託された預言的御言葉を、隠されたまま放っている者達。私が両手に持っているこの本は、私の父がそれを開く権威を私にお与えになったばかりの、命の書です。⑩ そして父がお選びになったこの聖別され、神聖とされた山の上で、全てが新しくなります。ここでこそあなた方は、聖都、新しいエルサレムを見るのです。⑪」「そしてここに、あなた方のなかで神の御住まいが現れるのです。けれどもその時には、この謙虚な神に仕える者（マドレーヌ）が語った御言葉に敵対し、拒否した者達は胸を叩くことでしょう。私が私のメッセージを告げ知らせるように、と頼んだあなた方は、間もなくこの世に訪れることを人々に知らせないままにしているため、罪に問われます。自分自身の熟考に頼ってはいけません。なぜあなた方は、私が教理に適った祝福をあなた方に与えたことに反抗するのですか？慈悲によって、私はあなた方に頼みます。私の言葉を聞きなさい。私の心は慈しみに満ち溢れているのです。」イエスは立ち上がられ、テーブルは消えました。主は長い間私に微笑まれて、こう言われました：「司祭と、あなたに出会う全ての人々に、あなたが今見たこと、聞いたことを語ってください。あなたはそれを1日中覚えているこ

とでしょう。」それからイエスは一瞬のうちに姿を消され、私は再び暗闇の中の戻りました。⑬

⑭「命の書」については、以下参照：出エジプト 32 章 33 節；詩篇 68 章 29 節；ダニエル書 7 章 10 節,10 章 21 節,12 章 1-14 節；マラキ書 3 章 16 節；Siracide 24 章 23 節；ピリピ人への手紙 4 章 3 節；ヨハネの黙示録 3 章 5 節、5 章 1 節,13 章 8 節、17 章 8 節,20 章 12 節,21 章 27 節

⑮ 参照：ヨハネの黙示録 21 章 22 章

⑯ その時唯一その場にいたスザンヌ・アボワヌは、マドレーヌが十字を切りながら「もしもサタンならば、消えるように。」を言うのを聞いて、泣いた。彼女はマドレーヌが疑いを持っているのだと考えた。主が去られた後、マドレーヌはスザンヌに 1978 年 2 月 3 日に起こったことを説明した。なぜならオルセオ司祭はマドレーヌがそのことを語るのを禁じていたから。マドレーヌは修道女達にこう弁解しました。「もしも主が彼女に、そこにいることを許されたのだとしたら、それは主が、彼女に、起こったことを知らせよう望まれたからです。」

第 49 回目

「マドレーヌ、これで 3 度目になりますが、私の使徒となって
私にあなたに頼んだ仕事を完遂してください。」

1978 年 10 月 6 日 (金) 9 時 15 分、月初めの金曜日、修道女達の礼拝堂にて

授業がある日はいつもたいていそうするように、私は子供たちを学校に送り届けてから、聖櫃におられるキリストを拝みに礼拝堂へ行きました。9 時に着きました。私はひとりきりでした。9 時 15 分ちょうどに (教会の鐘の音が聞こえました)、光が私の目の前に現れました。私はプルノ修道女を探しに行こうと思いましたが、時間がありませんでした。イエスが目の前に姿を現されました。いつものように、私を迎えるかのように両手を差し出した姿勢で。そしてこう言われました：

「十字を切ってください。」

主は私にずっと微笑んでおられました。それから両手を組んで、悲しげな様子で言われました：「絶えず祈り、悔悛の秘跡を行いなさい。」

主は真剣な様子でおられました。また、私に個人的におっしゃいました：

「マドレーヌ、これで 3 度目になりますが、私の使徒となって私にあなたに頼んだ仕

事を完遂してください。恐れてはいけません。あなたは私のために憎まれるでしょう。けれども、その後には光の子供達が立ち現れるでしょう。」

それから沈黙の後：「今日またあなたは私を見ましたが、もはやあなたは私を見なくなります。けれども私は、私の体と血によって、あなたを訪れ続けるでしょう。」

沈黙の後：「けれどもこの十字架が地上から立上げられる時、そこであなたは私を再び見るでしょう。なぜなら、その時には、私は今開けられたばかりの命の書の中に書かれている秘密を教会に明かすからです。あなたが今見たこと、聞いたことを、司教に言いなさい。」

それからイエスは、私に微笑まれて言われました：「このような私の依頼について、心配してはいけません。あなたは、この地上の誰も持ち得ない知恵を持ちます。不正がはびこっているこの地上において、あなたの静けさと沈黙は、私の言葉の目に見えるしるしです。あなたの顔にはいつも目に見えない神聖さが反映されているように。

あなたに言います。司祭に従いなさい。この地上においては、彼だけが、私の父の御心を行う責務を負っているのです。けれどもこの世はなんと不幸なことか、彼は物事を遅らせています。」

それからイエスは私に微笑まれ、消えていきました。⑱

この1978年10月6日、イエスは私に関することをおっしゃいました。今日そのことをお明かします。イエスが私に「絶えず祈り、悔悛の秘跡を行いなさい。」と言われた時、主は大変真剣な様子であられました。私を悲しげにご覧になりながら、付け加えられました。「もはや1日たりとも、この街から離れないでください。いつもこのメッセージのことに心に留めて、祈ってください。毎日、人の子の再臨を待ってください。私はこのことを悔い改めの心を持って行うようあなたに依頼します。あなたの報いは大きいでしょう。」

私は主が私に頼まれたことを、悔い改めの心を持って行う、と彼に約束しました。

イエスは、私達人間が通常考えるようなことを知っておられる方です。一度も旅行したことがない私が出掛けること、ちょっとした旅に出ること、ルルドへ行くことなどは私にとって楽しいことだと知っておられます。けれども、悔い改めの心を持って、イエスは私に決してこの街から離れないように、1日たりとも出ないようにと頼まれま

した。それはまるで献身して修道院に入った修道女の生活に少し似ています。私はこの街を離れてはならないのです、1日たりとも。つまり、いつもこのメッセージのことを心に留めて祈り、人の子の来臨を毎日待つということです。もちろんこれは大きな犠牲ですが、同様に神のご計画が成就されるため、栄光の十字架が建てられるために私が行うべき悔悛の秘跡なのです。この手記を読む方々は、どうか私のために祈ってください。イエスが私に頼まれたことを確実に成し続けられるように。なぜなら私はイエスが頼まれた通り、悔悛の秘跡をするとキリストに約束したからです。そして私は生涯主に従いたい、と望んでいます。旅行など自分の楽しみのために時間を使うということは決してせずに。

⑨1978年のある朝、ドズレでは石でできた大きなカルバリ像が倒れ、キリストの胸と両足が割れた。



ドズレのカルバリ 1978年

第49回目 その2：夢とローラン・オモンの回心 1979年1月

私の夫はルルドへ巡礼の旅に発ちました。私はそのことがとても嬉しいのです。なぜなら彼の突然の回心以来、彼は変わったからです。彼はある人に言いました：「マドレーヌは、年老いた実母(90歳)と幼い子供達のために、私と一緒に来られない。でも私はいつか彼女が、ルルドのみならずエルサレムにも行けるといい、と思っている。」なぜなら私は彼にまだ、1978年10月6日(金)、イエスの最後のメッセージがあった時に、主が私に言われたことを言っていなかったからです。

私は皆さんに私の夫のことを話さなければなりません。彼は全く信者ではなかったのですから。彼は、私が日曜日にミサへ行くのを見ると、よく「時間の無駄だ。」と言

いました。イエスのメッセージについて知っている人の中には私にこう言う人もいました。「私はあなたが理解できない。もし私があなただったら、私はこのメッセージのことを夫に言うでしょうに。」私はいつもこう答えていました：「いいえ決して言いません、教会がこのメッセージの信憑性を確認するまでは。」けれどもある日、私は夢を見ました。人が、それを昔、幻と呼んでいた類のものですが：私はイエスがお現れになり、こう言われるのを聞きました：「あなたの夫に告げる時が来ました。」それは1979年の年初でした。その日以来、私は夫にこのことを語りたい、という衝動を感じ続けていました。私は3月28日、私が初めて十字架を見た記念日に、彼に言おう、と考えました。そこで私は、リズウーの巡礼総括責任者である、ジール神父に手紙を書きました。彼が、司教からこのメッセージの担当者として任命されている人です。私は彼に、3月28日夫にメッセージのことを伝えても良いという許可がほしい、と頼みました。神父は私に手紙で同意の意を伝えてくれました。私は司教に手紙を書く時、彼からの返事が届く時には、夫がいないように、と取り計らいました。そこで、夫が朝から自宅にいる週には私は返事を受け取りませんでした。私がジール神父から返事を受け取ったのは、次の週でした。けれども夫は自宅にいたのです。1979年2月2日金曜日のことでした。夫は私に尋ねました「リズウーから誰が君に手紙をよこしたのかい？」私は答えました：「ジール神父よ。」「なぜ神父が君に手紙を書くのかい？」そこで私は彼に言いました：「神父は私の手紙に回答してくれたのよ。」彼がジール神父の手紙を読んだ時、彼はかなり怒って言いました：「もしもこれが神に関わる話だったら、僕は聞きたくない。」私は彼に言いました：「このことについては、3月28日にあなたに話すわ。」そこで話は終わりました。土曜日も日曜日、私達はそのことについて話し合いませんでした。けれども月曜日、まれなことなのですが、私は食事の時彼と二人きりでした。毎週月曜日には来ていた修道女が、この月曜日には来ない、と私に連絡してきました。病床にいる母は、ベッドに寝たきりで、子供達は授業に出掛けていました。そういう訳で、私は小さな台所に彼と二人きりでした。夫は工場の仕事から戻ってきたのです。1979年2月5日月曜日、彼は私に言いました：「僕に話すことがあるんだったら、3月28日まで待つことはない。今すぐに知りたい。」私の心臓は強く打ちました。約9年間、秘密にしてきたことを彼に語る時が来たのです。心の奥底で、

私は神に願いました、私を助け、夫の回心のため長年に渡って祈ってきた祈りに応えてくださいと。けれども私は怖かったのです。彼は 3 日前に私にこういったのですから：「もしもこれが神に関わる話だったら、僕は聞きたくない。」私はまず、ジール神父に書いた手紙の下書きを彼に手渡しました。それによって、なんのことにについてなのか彼が少しでも分かるだろうと思ったのです。その中に、私は始めて十字架を見た記念の日、3月28日に夫に告げる、と神父に書いていたからです。夫はこの手紙、つまり下書きを読み終えて、私に尋ねました：「君は十字架を見たのかね？」私はすぐさま答えました：「ええ。」私は彼に、初めて十字架を見た時のこと、始めてイエスを見た時のことを話しました。彼は私の話を聞きました。彼の顔は蒼白になりました。私の話を聞いて、完全に打ちのめされたようでした。それから彼は言いました(震えた声で)。「君とキリスト。もし僕がこのことをもっと早く知っていたら、これまで君に言ったようなことは決して言わなかっただろうに。許して欲しい。僕は頭を下げる。君のことを尊敬する。僕は高みから落ちた。今は全てが違ってしまった。僕は変わる、と君に保証するよ。」等々。彼は目に涙を浮かべていました。私達は1日中、このメッセージのことを語り合いました。それから彼は修道女に会いに礼拝堂へ行きたい、と言いました。ブルノ修道女が彼を迎えました。彼女と一緒に礼拝堂に入り、ひざまずいた、と彼女は後に私に言いました。彼は主の祈りと、天使祝詞を唱えました。私は、彼は泣いていただろう、と思います。彼は3日の間動揺して、外へ一歩も出ませんでした。私はどんなに嬉しかったことでしょうか。私は彼が、イエスという言葉を発するのを聞いていました。今では、彼はイエスが生きておられること、私達の間におられることを知っています。メッセージが始まって以来、夫の回心はイエスが私にしてくださったことの中で、一番の大きな恵みでした。私は夫の回心を疑うべきではありませんでした。イエスは言われました。「求めなさい。そうすれば与えられます。」私は夫の回心を何度も願いました。悔悛の秘跡はいつも夫の回心のために行いました。それから私はこう考えるべきでした。イエスは婚姻によって結んだものを解くことはできないと。私達は、イエスに対して十分な信頼を置いていません。私達をこれほど愛し、私達の願いを聞き、助けたいと願っておられる方に。次いで私は再び恐れを抱きました。この回心が単に一時的なものではないかと。けれどもそんなことはありません

んでした。彼は、私が何も言わないのに、数回に渡ってミサに行きました。私はイエスのこのような恵みにどれほど感謝したことか。さらに、このことは私にとって大きな支えでもありました。彼は今や、私がミサに行くためにはあらゆることをしてくれます。この前の9月18日火曜日には、私達は戦争捕虜の巡礼の旅でルルドへ行くため、夫を駅まで車で送りました。彼はとても嬉しそうで、平安の中にいました。私は聖母に祈ります。彼を恵みと喜びで満たすように、取るに足りない物質的な喜びではなく、精神的な喜びでこの地上での最後の日まで、彼を満たすようにと。この平安と喜びが、私達を幸いで満たすイエスと共に永遠のものとなるように。

マドレーヌ・オモンの手記

*ロラン・オモンは1979年2月5日に回心し、1995年6月21日天に召された。

第50回

「イエスは彼のメッセージを告げ知らせる全ての者に祝福をお与えなします。」

オルセ司祭と私は数人の友人と一緒に9日間祈禱をすることにしました。

9日後の1982年8月6日、キリスト御変容の祝日、小教区教会にて

私は光に気づきました。イエスが私に言われていたように、私は十字を切りました。

それから私は聖櫃の少し左側に大天使ミカエルがいるのを見ました。

彼は私に言いました：「私はあなたに挨拶します。神は、その大いなる愛によって、真実の証言をするために私を遣わされました。人類になされた約束の9日目に、サタンがあなたを誘惑しました。それは9ヶ月目の第1日に私があなたを訪れた時まで続きました（1976年1月3日から1977年7月1日）。あなたが聞いた大音響は私が天から降りてきた音です。それは神が、あなたにつきまとう悪霊を追い払うため私を遣わされたのです。そのためにあなたは、光があつたにも関わらずそれを見なかったのです。私を真似る者は、地から出てきます。けれども司祭達の不従順のため、イエスは彼のメッセージを告げ知らせる全ての者に祝福をお与えになります。なぜなら、この世は、明日曙の時に起こるべきことを、これ以上長く知らないままではならないからです。けれども、祈り、悔い改めなさい。偽者達が踏みつけられる時が近いからです。」それから全てが消えました。